

ベルクソンにおける持続の観念について

釜掘, 幸
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/4494547>

出版情報 : 比較社会文化研究. 13, pp.26-31, 2003-03-31. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン :
権利関係 :

ベルクソンにおける持続の概念について

カマ ホリ
釜堀

ミユキ
幸

ベルクソンの『意識に直接与えられたものについての試論』(1889年)の主題は、実在の本質である持続を規定することである。ベルクソンの哲学は〈実在は持続する〉という単純な直観の上に立てられている。「この実在とは流動性 (mobilité) である。実在するものは既に出来上がったものではなくて、出来上がりつつあるものであり、自己を維持する諸状態ではなくて、変化する諸状態である。静止した状態は結局、外見上のものにすぎず、静止はむしろ、相対的なものである。我々が、不断の流れをなしている我々自身の自己について抱く意識こそ、実在の内部へ我々を導き入れるものであり、その実在をモデルとして、我々は、他の諸々の実在を表象しなければならない。』

ベルクソンが実在をこのように説明していることから、我々は、『試論』において論じられている持続がどのような性質のものであるかを、ある程度うかがい知ることができる。それは、常に流れ動いていくもの、移行し、変化し続けるもの、生成していく実体そのものとしての持続である。このように解された持続とは、単に人間的な意味に限定された「心的 (spirituel) なもの」や、日常的な心理的経験のみを意味するものではなく、人間的経験を超越したものの、と言い得る持続である。なぜなら、ベルクソンによれば、日常的経験において与えられる状態は、純粋な持続ではなく——即ち純粋な動性、移行、変化、生成ではなく——持続と空間が混じり合い、融合したものである²⁾。

そのため『試論』の議論の大部分は、持続そのものの説明というよりも、むしろ持続と空間の徹底的な分割と、両者の本質規定に費やされている。しかし、日常的経験が持続と空間の混合したものであることを確認し、論証することが『試論』の主要な課題なのではない。実在が、純粋な持続とそれを侵害する空間という二つの側面に分割されるというだけならば、『試論』は通常の二元論の域を出ないと言われよう。重要なことは、〈実在とは持続するものである〉ということが、ベルクソンにとって、二元論的な分割を超えて一切の実在の本質である、という点にある。このことは、第三の主著『創造的進化』(1907年)に示され

ている生命進化の過程を考えるとわかりやすい。我々はそのに、「エラン (élan)」と表現される、どんな障害物をも乗り越えていく生命の運動、抵抗にあって一時的に塞き止められ、その場で足踏みすることはあっても、最後には前進することに成功する、止められず、冒しがたい移行、変化、生成といったものを見出すだろう³⁾。

では、この驚くべき推進力、自ら前進し生成していく力そのものともいえる持続、止むことなく変化し、流動し続ける持続とは、どのような本質のものなのだろうか？ ベルクソンは、日常的経験が与えるものをそのまま考察するのではなく、いわゆる混合物としての経験の中から、持続的なものと、持続的でない(空間的な)ものとを識別することから始める。両者の分割を通じて、実在の本質的な側面である持続を明らかにしていくのである。『試論』のもつおもしろさは、日常の心理的経験を越えた純粋な内的持続を考察しているという点にのみあるのではない。心理的持続は、我々が直接的にその全てを捉え得るという意味で特殊な実在ではあっても、実在するもののうちの一つにすぎない。従ってそれは、それ自体孤立的に考察されるべきものではなく、存在するものの在り方を示す一つの例として、実在一般の在り方を考察する契機となるものでなければならない。ベルクソンの持続の記述は、心理的な経験に特殊な持続についてのみ触れていると思われる場合でも、実在一般に対して常に開かれている。本稿では、ベルクソンの『試論』の議論を考察することを通じて、このような持続の本質を明らかにしていきたい。心理的持続がどのような仕方であつた他の実在とつながるのかを明確に示すことが課題である。

1. 質と量の区別

持続的なものと持続的でないものは、どのように区別されるのか。我々の意識に直接的に与えられているものは、本質的に拡がりのない、内的な諸状態の継起であり、新しいものの連続的な生成である。これに対して、空間は本質上拡がりを持ち、事物が相互外在的に展開される無規定で

等質的な領域を意味している。前述したように、ベルクソンは持続の規定に際して最も適切である事例、つまり我々にとって最も直接的であり、何の媒介もなしに観察し得る実在の例として、心理的持続を取り上げる。しかし、「我々が直接とらえていると思ひこんでいる自我自身のもっとも明白な諸状態も、大抵の場合には、外界から借りたある形式（空間的なもの）を通じて行なわれるのではないかと自問してみる必要がある⁴⁾」。ベルクソンは第一章の全てを、質と量との分割に費やしているが、それは「持続するもの＝実在そのもの」と「持続しないもの＝実在の空間的表象」との根本的な差異を示すためである。

まず、ベルクソンが意図するのは、意識の諸状態、つまり感覚、感情、情念、努力などの純粋に内的な状態（測定を許さないもの＝質）を、外延的なもの（測定可能なもの＝量）から峻別することである⁵⁾。「強い痛みの感覚」や「大きな悲しみ」といった表現を考えてみよう。内的な状態を量的なものとして表わすこうした習慣の根底には、重ね合わせによる比較ということ、つまり空間的なもの見方がある。それは、純粋に内的な意識の状態、即ち少しも空間を占めていないものに対して、「大小」や「多少」といった空間的な尺度を押し付ける発想であるが、ベルクソンは、こうした考え方を質と量の混同とみなして徹底的に排除しようとする。なぜなら、意識の諸状態は「それ自身として考えると、量とは何の関係もなく、純粋な質⁶⁾」だからである。内的な状態と、外延的なものの間には、空間における大きさという点からいって、共通のものはいない。従って、独自の質として与えられる感覚を、あたかも拡がりを占める物体のように一つの名前で呼び、数量的な尺度を用いて示す考え方は、訂正されるべき誤りなのである。

ベルクソンは、感覚や感情、情念、努力など様々な事例を挙げて、意識の諸事象が量的なものとして空間化される過程を描いているが、ここでは「筋肉の努力」に関する考察を取り上げたい⁷⁾。我々がある一定の重さの荷物を持って立っているところを想定してみよう。おそらく時間が経てば経つほど、荷物を持ち続ける努力は増大していくように感じられるのではないだろうか。「意識は、あたかも強さが拡がりとなって展開されるように、外部に拡がるように見える⁸⁾。」しかし、感覚の増大に関するこのような知覚は、実は、我々が努力の感覚の強度を、作用に共感し反応する身体部分の数と拡がりによって測定することからきている。則ち我々は、筋肉の収縮や末梢感覚といった外的な要素に依存して、感覚を理解し、説明するのである⁹⁾。

感覚を量的なものに空間化するこうした考え方には、どのような問題があるのだろうか。ベルクソンによれば、純粋に内的な状態を量としてとらえる空間化の作業には、対

象そのものを、その独自の在り方に即して把握するという意味での「直接性」が欠けている。ここで改めて、「筋肉の努力」において我々の意識に直接的に与えられるものを、それ自身においてとらえてみよう。おそらく始めのうちは、荷物を持つ腕に特殊な感じがある。しばらくの間、この感じは質的な変化をするのみである。疲労や苦痛は感じられない。しかし、この特殊な重さの感じは、ある瞬間に疲労感に変わる。次いで、疲労の感じは苦痛の感じになる。

つまり、我々の意識に直接的に与えられているのは、拡がりを占めない感覚であり、感覚の質的な変化である。おそらく人は、こうした感覚の質的な変化も、その背後で行われる外的な要素の変化によって、則ち、身体組織の諸反応や、その感覚を生みだした計測可能な原因の数や大きさによって理解し、測定することができる、と主張するかもしれない。しかし、それでは問題の解決にはならない。「なぜなら、ある一つの感覚の強度は、我々の身体組織の中でなされた仕事の大小を表わすかもしれないが、しかし、意識によって我々に与えられるのは、感覚であって、この機械的な仕事ではないからである¹⁰⁾。」感覚を、それに関連すると推定される外的な要素によって、間接的な仕方では説明することはできるだろう。しかし、そうした説明は、どんなに詳細なものであろうと、直接的に与えられる感覚それ自体ではない。意識の所与を量として把握することは、感覚における固有な、量として表現されえないものを捨象することであり、質という独特な存在様態を排除してしまうことを意味するのである。

我々は、本来は主観的で拡がりのない質的なものを、重ね合わせや置き換えができる、外延的で測定可能なものとして空間化し、客観化する強い傾向をもっている¹¹⁾。質的なものの空間化には、社会生活の要求によく適合し、生の便宜を図るという明確な利点があるため、我々は徐々に、主観の状態よりも、その客観化されたものの方を重要視するようになり、内的状態を外的原因によって計算したり、質的なものをその人為的構成物と同一視するにいたるのである。しかし、それは拡がりのないものを、人為的に構築された空間的な枠組みにおいて考えることであり、質的なものの在り方を飛び越えて、その本質を見失わせるような捉え方ではないだろうか。実際に自己の意識の内部で起きていることを誠実にたどるなら、そこには、大きさの変化があるというよりは、むしろ意識のそれぞれの状態の質と、その変化しかないとわかるのである。意識の直接的所与とは、そのような質と、その変化に他ならない。

2. 質の一元論

「試論」第一章における質と量の区別は、一見、持続と

空間という二元論的な図式を展開するための予備的な考察であり、〈外的世界に対する内面性の擁護〉という構図の一部を担うもののように見えるかもしれない。しかし『試論』第一章には、後のベルクソン哲学の歩みを決定付ける規定があるという意味で、それ以上のものがある。それはベルクソンが、實在の在り方を説明するにあたって〈質〉という様式を提示したことである。つまり實在が、その人為的表象の示すところとは違う仕方で〈在る〉ことを明らかにしたのである。

ベルクソンは質と量の差異化を通じて、意識の直接的参与が、その空間的な表象とは全く別の存在様式をもつものであることを示した。しかし、質と量の区別が、精神的なものをそれ以外のものと区別する《實在の二元的分割》を意味すると考える必要はないし、また『試論』を、精神を高位においた二元論とみなす理由もない。一般に、質と量の分割を徹底する『試論』が二元論として捉えられていることは確かである¹²⁾。しかし実は、ベルクソンは『試論』において、實在が二元的なものであるとか、實在は質と量の混合物であるとは主張していない。我々は、『試論』で問題にされているのが、實在そのもの（質）を、實在の外的形式（量）と混同し同一視する、社会的、実践的な必要に由来する認識上の錯覚であることに注意しなければならない。「自我をその原初的な純粋さにおいて熟視するためには、心理学は、外界の明白な刻印を身につけたある種の形式を、除去するなり訂正するなりしなければならぬ¹³⁾。」「これらの形式を、我々の人格の認識のために用いるならば、我々は、自我を入れる枠組の反映、つまりは外界の反映を、自我の色づけそのものと思い込む危険がある¹⁴⁾。」つまり、『試論』では、心理的實在の直接的な認識ということ、即ち、實在そのものを捉えるために、質と量のどちらの眺めをとるべきかが問われているのであって、實在の分割ということは問題にされていないのである。

ベルクソンが實在の区分を問題にしていないのは、単純な理由による。ベルクソンにとって、實在とは質そのものであり、質的なものだけが實在とみなされているのである。この實在観に従えば、質と区別されるもう一つの實在の区分などありえないことになる。量はあくまで實在の符号或いは略図でしかなく、量には質のもつ直接的な實在性が欠けているのである。従って、ベルクソンが行った質と量の区別は、實在そのものの二元的分割ではなく、實在的なものと非實在的なものの差異化を意味している。質と量の区分は、一元論的な立場から考察され、理解されるべきものであるといえよう。

ドゥルーズは、ベルクソンの哲学には、質と量の實在的な差異という二元論的な側面と、質と量とともに持続の緊張—弛緩という視点でとらえる一元論的な側面があるとし

て¹⁵⁾、ベルクソンの思索の進展を、存在論的一元論（『物質と記憶』1896年）による二元論（『試論』）の超克という図式においてとらえている。しかし、このような仕方でも両者を統一的に把握しようとする試みには、かなりの困難が伴う。『試論』の二元論は、『物質と記憶』において一元論に吸収されるのだ、と主張されるとしても、もし我々が、質と量の差異を、實在の二元的な区分とみなしてそれに執着するならば、一元論による二元論の吸収という解釈は強引なものになりかねない。『試論』では、持続するものは心理的實在だけであり、量的なものは持続しないとされていた。両者の差異は持続の有無という点で決定的に規定されたのである。しかし、『物質と記憶』では、物質的なものも、極度に弛緩した水準においてではあるが、固有の持続を持つことが認められる。「我々は自然の中に、我々の内的状態の諸継起よりもはるかに速やかな諸継起があることを予感している。…実際は、唯一の持続のリズムがあるのではない。我々は異なった多くのリズムを想像することが出来るし、それらはより緩慢であるか速やかであるかによって、意識の緊張或いは弛緩の程度を示し、またそのことによって存在の系列におけるそれらの各位置を定めるだろう¹⁶⁾。」

ここで我々は、『試論』における（二元的な意味での）質と量の差異が、程度の差異ではなく（持続的なものとそうでないものとの）根本的な、本性上の相違であったことを想起する必要がある。この本性上の差異が、『物質と記憶』では、程度の差異に移行してしまうのである。質と量の差異を、實在の二元的区分とみなす限り、二元論から一元論へのこうした移行を、矛盾に陥らずに説明することは不可能であろう。ドゥルーズは持続の多様性ということ、即ち持続のリズムが、緊張と弛緩の間のあらゆるレヴェルを有していること¹⁷⁾を引き合いに出してこの移行を説明しようとする。「持続は物質の最も収縮した段階に他ならず、物質は持続の最も弛緩した段階に他ならない¹⁸⁾。」しかしこうなると、『試論』の二元的分割は心理的なものにしか適用されない、理論上の区分でしかなくなり、結局「存在論への序曲¹⁹⁾」にすぎないということになるだろう。だがそれでは、『試論』が提示した、質という存在様式の本質、空間を占めない独特な在り方というものが著しく狭められてしまうのではないだろうか。

しかし、もし我々が最初から『試論』を二元論とはみなさず、質的なものの一元論としてとらえるならば、事情は違ってくるだろう。既に述べたように、『試論』は、我々が直接的で實在的なもの（質）を、知性によって構成された非實在的なもの（量）と混同していること、そのために實在についての直接的な認識ではなく、實在と非實在の混合物しか得られていないことを問題にしていた。『試論』

は、実在に関する二元的で混合した認識を純化して、実在そのものの絶対的な、従って一元的な認識を取り戻そうとする試みなのである²⁰⁾。つまり、質と量の差異を、実在する二つのものの存在上の差異としてとらえるのではなく、認識上の区分、即ち実在的なもの（意識の直接的所与＝質）と、実在的ではないもの（知性の分析と総合によって構成されたもの＝量）との差異を明確にしようとしたのである。ベルクソンは、質的なものだけが実在的であるという一元論的な立場から出発しているのであり、その立場は一貫している。

【試論】では、考察の対象が感覚や感情、情念などの心理的経験に限られているために、それ以外のものについて特に詳細な記述はなされていないが、それでも、ベルクソンが本質的には一元的な観点に身を置いていることが伺える記述が幾つかある。まず、二元的な実在を越えた内容をもつ以下の記述がある。「確かに我々は、事物は我々と同じように持続しないとはいえ、それにもかかわらず、事物のうちには、諸現象が継起して、一度に展開するようには見えないようにする、何か理解しがたい理由があるに違いないということ、はっきり感じている²¹⁾。」「我々の外部にあっては、持続のうちで何が存在するのか。ただ現在だけである。あるいは同時性といってもいい。おそらく外的事物は変化するが、それらの諸瞬間が継起するのは、ただそれらを記憶する意識に対してだけである。…従って、外的事物が持続するというべきではなく、むしろ、それらの事物のうちには何か表現できない理由があり、この理由から我々は、持続の継起する諸瞬間にそれらの事物を考察するならば、それらが変化したと認めざるをえない、というべきである²²⁾。』外的な事物は、少なくとも同時性という状態において、時間に、即ち持続に関わっているのである。更に、【物質と記憶】における持続のレヴェルの多様性の記述を先取りしているように見える記述もある。「自由には、様々な程度がある²³⁾。』これらの記述は、全く異なるリズムの持続が共存することや、持続の緊張には様々な程度があるということを示唆しており、【試論】以後の持続の一元論の核心をつく内容をそなえているといえよう。

従って、ベルクソンは、【試論】において質という存在様式を持ち出した時、もはや対立的なものの見方にとどまらない、一元的な場面を考えていたのではないだろうか。質という存在様式が、単に心理的内容にのみ適用されるべきものではなく、存在するもの全てに見出される〈在り方〉であるということ、それが質の規定の意味するところではないだろうか。

一切の実在が、空間化されない質的な在り方を有することは、具体的にはどういうことなのだろうか。このことは、

我々の知覚できる世界としての宇宙においては、完全に等質的なものは我々にとって存在しない、つまり知覚されることがないとする理論物理学の見解を考慮するとわかりやすい。言葉の厳密な意味で等質的なもの、一様なもの、均一なもの、他と区別できないものを、我々は認識することができないし、直接的な対象として思考することもできない。我々が外的な事物のそれぞれについて、色であれ輪郭であれ大きさであれ何らかの判明な知覚をもつとすれば、それは、それらの事物がある仕方であらゆる均一性を破るような在り方をしていからであり、何らかの質的な様態を有しているからである。この点からも、質と量の区分が、拡がりのない純粹に内的な意識と、拡がりをもつ空間的な事物とを分ける、存在論的な二元論に属するものではないということがわかるだろう。質と量の区別がその種のものであるならば、それは結局、実在が精神と物質という対立的な、共通するところのない要素によって構成されていることを確認するだけであって、デカルト以来の心身問題と同様に、相対する二つの要素がどのように結びつき、混合して実在を形成するのかという問題は解決されないままに残される、或いはその解決を超越的原因にゆだねざるをえなくなる。

質と量の差異化が真に意味するところは、あらゆる実在は質的なものであり、我々がその存在を知覚するものは全て、我々の意識と同じ仕方ではないにしても、質的なものとしての存在様態を有するということである。質は実在の在り方そのものを意味しているが、それは「絶えず形成の途上にある生きた存在として測定を拒否する状態²⁴⁾」であり、「その諸状態や変容は密接に入りこみ合い、いったんそれらを分離して空間中に繰り広げようとするや否や、はなはだしい変質をこうむる²⁵⁾」のである。

こうした在り方は、心的実在だけでなく物質においても観察される。「量子力学の見方に立つならば、時間的に一貫して存在する客観的世界などは存在せず、世界はある意味で各瞬間ごとに新しくなっていると言える。世界は一個の統一体として、つまり部分状態の総和という意味ではなく、類ない存在として時々刻々出現する。世界の《今》は過去の瞬間の世界と実体的には同一ではない²⁶⁾。』それは、「物質が安定したものではない」こと、「素粒子が生成変化する」こと²⁷⁾を意味し、物質的な実在でさえ測定による変質を免れない質的な在り方をしていことを示している。従って、ベルクソンの実在把握には、諸要素の対立や両立といった原理は存在しない。量が質の外的な形式である限りにおいて、質は量に先立つ。質が端的に実在の存在様式であることを顕にしているのに対し、量はその〈影〉でしかないという意味で、両者は区別されるのである。

ベルクソンは、心理的持続の本質を明確にする前に、質

という存在様式を規定することによって、真の持続を考察する場を設定したといえる。また、実在を質として規定することによって、ベルクソンは、心理的経験をもちうる潜在性を物質において見出し、精神と物質の二元論を超えた存在論を提示したのである。

註

次のベルクソンの著作の引用には以下の略号を用いた。〔 〕内は使用した邦訳。(テキストは Henri Bergson, *Œuvres*, Presses Universitaires de France, 1959.)

DI=H. Bergson, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, 1889 [邦訳『時間と自由』世界の大思想Ⅱ-11, 河出書房, 1967] 本文中では『試論』と表記する。

MM=H. Bergson, *Matière et mémoire*, 1896 [邦訳『物質と記憶』ベルクソン全集 2, 白水社, 1965]

EC=H. Bergson, *L' évolution créatrice*, 1907 [邦訳『創造的進化』世界の大思想Ⅱ-11, 河出書房, 1967]

PM=H. Bergson, *La Pensée et le mouvant*, (邦訳『思想と動くもの』)。本稿では、その中の論文『形而上学入門』については以下のように表記する。

IM=H. Bergson, *Introduction à la métaphysique*, 1903 [邦訳『形而上学入門』世界の名著53, 中央公論社, 1969]

- 1) IM, p. 211.
- 2) cf. DI, pp. 96-104.
- 3) cf. EC, pp. 246-271.
- 4) DI, p. 167.
- 5) cf. DI, pp. 1-5.
- 6) DI, p. 102.
- 7) cf. DI, pp. 15-20.
- 8) DI, p. 15.
- 9) cf. DI, p. 18. 「ある一つの努力が増大する印象を与えれば与えるほど、交感的に収縮する筋肉の数は増加し、身体のある一点の上で努力の強度がいつそう増大することの意識とみえるものは、実際には、その動作に関わる身体の表面がいつそう大きくなることの知覚に帰着する。」
- 10) DI, p. 5.
- 11) ベルクソンによれば、純粋に内的な状態を空間化して考える習慣は、生の便宜に関わる実利的な思考態度、即ち対象の人為的な再構築ということに由来している。我々は日常、自己の欲求や意志をより能率的、効果的に実現していくことを求めている。この観点からすれば、意識に直接与えられるものを、外的事物のように、明確な輪郭をもつ固定的なものとして扱う方が都合がよい。「我々は、自分の印象を本能的に固体化し、これを言語によって表現しようとする傾向がある。(DI, p. 97.)」こうして、意識の諸状態を、それとは全く別の系列の事実、例えば身体的な兆候或いは原因のような外的要素を経由して説明する手続きがとられることになる。純粋な質である内的状態は、等質的な境位に位置付けられ、量や拡がりをもった対象として扱われるようになるのである。cf. IM, pp. 211-218. 「固定した支持点を求めようとする我々の精神が日常生活で主要な機能としていることは、状態や事物を表象することである。…こうした置き換えは、常識、言語、実際生活にとっては必要である…。…知性は既成概念のうち立場を定め、流動する実在の何ものかを既成概念の網の中

へすくいあげようとする。実在の内面的、形而上学的認識を得るためではなく、単に実在を利用せんがためにこうした手続きがとられることは確かである…。…しかし、このようにすることによって、我々の知性は、実在からその本質そのものを取り逃がすことになるのである。」

- 12) cf. 檜垣立哉, 『ベルクソンの哲学』, 勁草書房, 2000年。『試論』の二元的対立は持続のリズムの差異によって規定され、解消されるとしている。
cf. 淡野安太郎, 『ベルクソン』, 勁草書房, 1958年。時間と空間を二つの存在秩序とみなしている。
cf. V. ジャンケレヴィッチ, 『アンリ・ベルクソン』(阿部・桑田訳), 新評論社, 1997年。ジャンケレヴィッチは、ベルクソンは持続が意識に限られるものではないことを既に予感していたように見える、と述べている。しかし、『試論』の内容については、二元論を超えるものにはなっていないという見解を示している。
- 13) DI, p. 168.
- 14) DI, p. 168.
- 15) cf. G. ドゥルーズ, 『ベルクソンの哲学』(宇波訳) [以下、ドゥルーズと表記], 法政大学出版局, 1974年, 79頁。
- 16) MM, p. 232.
- 17) IM, p. 208. 「直観の努力によって一挙に持続のうちに身をおくならば、そこにはある全く特定の緊張の感じが得られ、そうした特定の緊張そのものは、無限に可能な多くの持続のうちから選ばれた一つと見える。いったんこの持続に入れば、我々はそれ以後、互いに甚だ異なった持続をいくらでも好きなだけ多く考えることができる。」
- 18) ドゥルーズ, 103-104頁。
- 19) ドゥルーズ, 83頁。
- 20) cf. M. ボンティ, 『シーニユ 2』(共訳), みすず書房, 1970年, 46頁。「私の持続を直観することは、物の見方一般を学ぶことであり、一切のものを——普通に主観と呼ばれるものや客観と呼ばれるもの、さらには空間と呼ばれるものをさえ——持続の相のもとに考察し直そうとするベルクソンの一種の「還元」の原理ともなる。」
- 21) DI, p. 157.
cf. A. Pihonenko, *Bergson*, 1994. フィロネンコは『試論』に関する考察において、外的な事物は、意識としての持続という意味では、持続するというべきではないと述べている。しかし、空間化を行う知性の操作に適合しながらも、その操作に完全に吸収されることはないとして、事物にも弛緩した持続があることを認めている。そして、『試論』は持続を心理学的に説明するものであるから、事物の持続の性質については説明されないという見解を示している。従って『試論』は一元的な仕方ではとらえられているように思われる。
- 22) DI, pp. 170-171. 事物の持続については、『創造的進化』に詳細な説明がある。
cf. EC, pp. 7-11. 「それにしても、継起は、物質の世界においてさえ、争われえない事実である。孤立したそれらの系についての我々の推理が、各系の過去、現在、未来の歴史は一挙に扇形に展開されるものだと考えても無駄である。この歴史は、あたかも我々の持続に類似した持続をもつかのように、やはり段々に繰り広げられる。一杯の砂糖水をこしらえようと思うならば、私はともかくにも、砂糖が溶けるのを待たなければならない。…私が待たなければならない時間は、私の待たしさと、言い換えれば、思いのままに伸縮されえない私自身の持続の或る一部分と、一致する。それはもはや思考される時間ではなく、生きられる時間である。それはもはや一つの関係ではなく、絶対的なものである。…一杯の水、

砂糖、砂糖が水の中に溶ける過程、それらは確かに抽象であり、私の感覚や悟性によって全体の中から切り取られたものであるが、この全体は、おそらく意識と同じような仕方で進展するであろう。」

「宇宙は持続する。時間の本性を深く究明していくにつれて、持続とは、発明を、形態の創造を、絶対に新しいものたえざる仕上げを意味することが、ますますはっきりとわかってくる。科学によって局限された系が持続するのは、その系が宇宙の他の部分と分かちがたく結ばれているからに他ならない。…従って、科学によって孤立させられた諸々の系についても、これを〈全体〉の中のものとの場所に戻すならば、それらに一種の持続をもたせ、ひいては我々の存在形式に類似した存在形式をそこに認めてもさしつかえない。」

- 23) DI, p. 125. cf. pp. 124-131. 自由とは、質的なものの連続的な生成である持続が、行為という場面において（外的に）あらわれることを意味する。「要するに、我々の行為が我々の全人格から出てくるとき、行為が全人格を表わしているとき、行為が全人格との間に、時に作品と芸術家との間に見られるような、はっきり言い難い類似を持つとき、我々は自由なのである。」「一言でいえば、もし自我から、自我からのみ生ずる全ての行為を、自由と呼ぶことにすれば、我々の人格の刻印を担う行為こそ、真の自由である。」

しかしベルクソンによれば、多くの人々は真の自由を知らずに死ぬ。「我々はほとんどの場合、空間を通しての屈折によって、自己をとらえるし、我々の意識状態は言葉において固体化されるし、また、我々の具体的自我、生きた自我は、心理的事実の外殻によって蔽われている。その心理的事実は、はっきり描きだされ、互いに分離され、従って固定されたものである。…言語のもつ便宜さと社会関係の容易さのために、我々はこの殻を突き破らずに、その殻が中身の形を正確に描きだすものと認めることを切望している。…つまり、ここで私は、意識をもった自動装置であり、それというのも、そうであることがたいへん都合だからである。我々の日常の大部分の行動がこのように行われること、また、ある種の感覚、感情、観念が我々の記憶のうちに固定化されるおかげで、外部からの印象が我々の側に、意識的でかつ知的でさえありながら、多くの面で反射的行為にも似た運動を、ひきおこすということもわかるだろう。」

24) DI, p. 174.

25) DI, p. 93.

26) cf. ツインマリ, デュール編, 『精神と自然』(尾形敬次訳) [以下, 『精神と自然』と表記], 木鐸社, 1993年, 28-46頁。

27) cf. 『精神と自然』, 47-59頁。